

指導内容の焦点化によって 指導時数不足をサポート

甲斐 今、現場では本当に時間が足りないんです。指導の自身はそんなに変わらないのですが、例えば、じっくり味わうためにもう一回声に出して読んでみるとか、読み取ったことについてディスカッ



甲斐 利恵子（かい りえこ）

1955年、福岡県生まれ。東京都台東区立御徒町台東中学校教諭。光村図書中学校国語教科書編集委員。著書に『子どもの情景』（共著・光村教育図書）『聞き手話し手を育てる』（共著・東洋館出版）『中学教師もつらいよ』（共著・大月書店）がある。

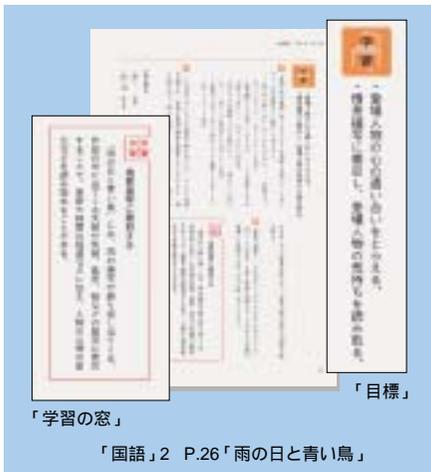
ションをするとか、あるいはそのことについて書いたものを読み合うとかして、学習の成果をみんなで共有できないのです。学習したことを定着させるということがとても難しくなっていると感じます。

ですから、つい、あれもこれもやらないうけないという気になってしまつたんですね。時間が足りなくて教科書を最後までやり切れないという現場の声も、ここから来ていると思つのです。確かに時間数は絶対的に不足しているのですが、教科書の一つ一つの教材で押さえればいいことがはっきりしていれば、大事な部分は丁寧に、あとは軽くやるという軽重をつけた扱いをすることができます。

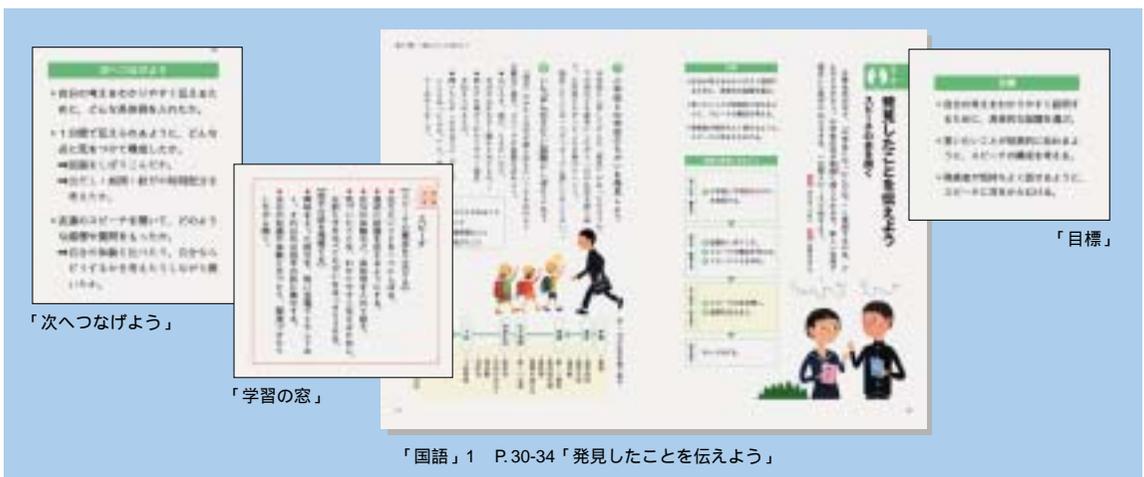
甲斐 時間がなくて、あれもこれもやらなくてという気持ち先が先に立つてしまつと、子どもを見るのが大事なのに、何か指導事項をこなしているという感覚になってしまつて、空しい感じがしてきます。言葉を学ぶ教室に独特の「ゆつたりした」とか「しみじみした」というゆとりがなくなつてしまつています。教材で何を重点的に学ばせるのかということが明確であれば、学習内容が焦点化できずいぶん助かるのではないのでしょうか。

ねらいがはっきりしているからこそ、 現場の事情に合わせて軽重をつけた扱いができるのです。

阿部 18年度版の教科書では、「読むこと」「の教材の後に位置している」「学習」の部分に目標が明示されていますね。この教材でどういう力をつけるのかということをはっきり出しているわけです。それだけではまだ少し抽象的ですが、「学習」の設定で教材に即して具体化し、さらに読み方のポイントを「学習の窓」で明確にするという構造をもっています。「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材でも、「目標」「学習の窓」、そして「次へつなげよう」の部分をはっきりさせている。先生方が上手に使ってくだされば、その教材でどういう力をつけるかあいまいだった部分がはっきりしてくると思います。



「学習の窓」 「目標」 「国語」2 P.26「雨の日と青い鳥」



「次へつなげよう」 「学習の窓」 「目標」 「国語」1 P.30-34「発見したことを伝えよう」

甲斐 教科書のこの教材で何を教えるのが明確になっているということは、指導時数を省くことに確実につながります。あれもこれも全部やらなきゃと思つてやる二時間と、「これだと思つてやる二時間ではぜんぜん違うんですね。時間が足りないという実態の中でも、教師がこれを教えるのだという自信があるならば、かなり効率的な授業が行えると思います。

阿部 時間が足りなくて教科書をやりきれないという問題も、先生方にこのような新版の新しい構造を理解していただき、それをもとに現場の事情や生徒の実態に合わせて軽重をつけた扱いをしていただければ、かなり緩和されると思えますね。それは、ねらいがはっきりしているからこそできるのです。

軽重をつけた扱いということでは、二年第三単元の「盆土産」と「字のないはがき」の場合は、まず「盆土産」で、家族像や人物像が強く現れている部分に焦点化しながら、豊かに読んでいきます。それを踏まえて「字のないはがき」では、例えば、「最も心に残るもの」といわれれば、父があて名を書き、妹が『文面』を書いた、あのはがきというこ

とになる。」「の部分と、父親が声を上げて泣くクライマックスの部分などに注目して読んでいくことで、「私」と父親の人物像が豊かに立ち上がってきます。何もかも読もうとしなくても、焦点化が的確であれば十分な読み取りが可能で、そして、確かな力もついています。

一年でプレゼンテーションのしかたを学ぶ提案のしかたを工夫しよう」の場合は、ねらいが情報検索、情報選択、そしてプレゼンテーションの構成の工夫に絞られています。そして学習活動としては、テーマ選びからプレゼンテーションの相互評価までが設定されています。ですが、すべての活動に取り組ませるのは大変だということであれば、テーマのある程度の部分は教師が提示して、情報を集めるあたりから丁寧に取り組ませ、指導するという設定ができます。テーマ選択の学習に時間をかけて取り組ませたいという先生は、そういう設定をすればいいのです。また、プレゼンテーションの構成の工夫や相互評価のあたりを特に重視して指導しようという先生は、その部分に時間をかけるといって設定をすればいいのです。

「読むこと」が目ざす新たな学習をサポート

高木 今「読解力の低下」ということが話題になっていますが、読むこと全般についての力がついていないという声があります。時間が減ったことはもちろん問題です。しかし、それを契機に、従来のなんでもかんでも教え込もうとするような読解の授業をリストラすることが必要だったと思うのですが、どうも十分できていない。少ない時間の中で従来と変わらない授業が行われた結果、何を学んだのかわからなくなってしまうわけです。OECD（経済協力開発機構）の調査を見ても、世界的に「読むこと」についての考え方がだいぶ変わってきています。従来のように文章を細かく読む力も

甲斐 今まで教科書なんて見もしなかった子どもたちが、自分から学習に取り組む姿勢をもったり、おもしろそうだから読んでみようと思ったりすること自体も指導時間の短縮につながります。この新しい教科書は、子どもたちが見通しをもって学習を進め、どんな力がついたか自分で確かめられるようになっていきます。子どもたちが、もっと読みたい、知りたいと思う工夫も随所にちりばめられています。ですから、教師は、今まで、授業の導入で、なんとかして子どもたちを学習に



高木 まさき（たかぎ まさき）

1958年、静岡県生まれ。横浜国立大学教育人間科学部教授。光村図書国語教科書編集委員。主な著書に、『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）『「本の世界」を広げよう』（共編著・東洋館出版社）など。

向かわせようとあの手の手を使ってきたわけですが、それを省いて学習の核心にガツと入っていけるわけです。高木 阿部先生や甲斐先生がおっしゃるように、教科書で学習の目標とか、学習の見通し、流れを、先生だけでなく子どもたちも共有しているという中で学習ができる。そのことが、時間の節約と同時に、何をここで学習しないといけないかということをはっきりさせてくれる、ということの意味は大きいですね。

大事ですが、それだけでいいという時代ではなくなってきていて、ビジュアルなものを読むという視点が入ってきているように思います。

阿部 今までの文学の指導について見れば、ただ書いてあることを確認して思いを想像するというのが、読解すればするほどつまらなくなってしまう。説明文についても、今までは、一方で内容を読み取らせることに終止するような指導があり、一方でテクニクの要約法を訓練することに専念するような指導がありました。しかし、OECDが求めているのは、そうではなくて、論理的思考力、判断力、推理力、批判的思考力などを駆使した読み方です。

そういう読み方は、日本の国語教育で

は十分に教えてこなかったのです。ですから、今までのあり方を反省しながら、新しい読解のあり方を作っていくしかない。ちょうど、いい意味の曲がり角かな、という気がするのです。

高木 そのような方向性の中で、「読むこと」が目ざす新たな学習の方向というもの教科書で示す必要があるだろうと思います。例えばその一つとして、18年度版の教科書では、非常にビジュアルな写真が付いている作品がある中で、「少年の日の思い出」（一年）のように最後に少し挿絵があるだけの作品もあります。つまり、「資料的なものが必要な読み」の一方で、「言葉からその世界へ、自分なりの想像の世界を広げていく」という読みの世界を大事にしているわけです。

これからの読みの力は、ただ読み取るだけでなく、表現するまでの流れを考えることが重要です。



阿部 昇 (あべのぼる)

1954年、東京都生まれ。秋田大学教育文化学部教授。光村図書国語教科書編集委員。主な著書に、『文章吟味力を鍛える - 教科書・メディア・総合の吟味』『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判』(以上、明治図書)、『あたらしい国語科指導法・改訂版』(編著 学文社)など。

アンケートの結果を見ると、「読むこと」を核に何かの活動を組み合わせた単元構成が望ましい、単元や教材での学習のねらいは明確であってほしい、という声が多数ありました。アンケートで寄せられたこのような声は、今度の新しい教科書でかなり具体化されたと思っています。

高木 自由裁量という意味で、最もその度合いが強いと見える資料集的な教科書という発想は戦後からずっとあります。実際に、戦後しばらく、言語編、文学編の時代というのがあって、一つが資料集

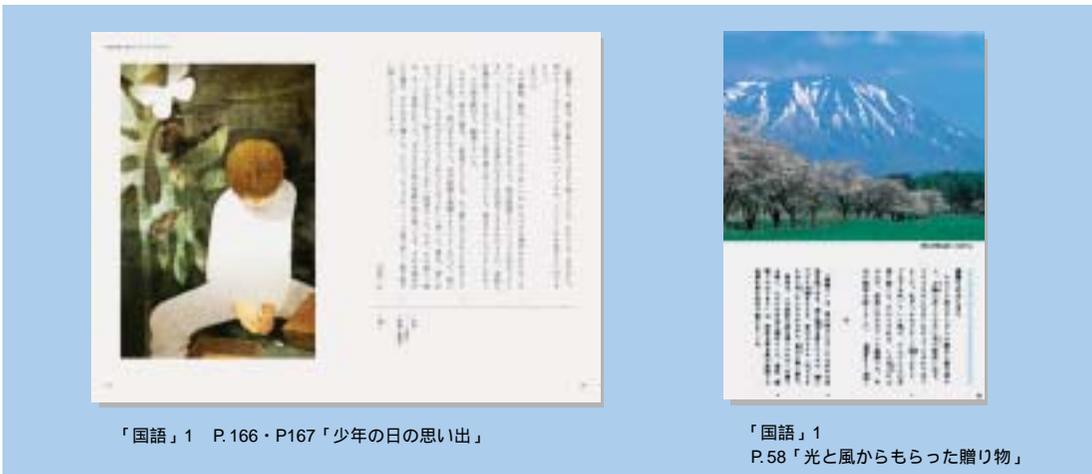
一つが活動集という教科書だったので、結局使いこなせなくて、十年くらいで消えていきました。現在の教科書は、そのような歴史を経て作られてきたわけです。

例えばこのような教科書だと、「書くこと・話すこと」の活動をするために、どの「読みの資料」と組み合わせるかということから考えなければいけないわけです。すべて先生たちの裁量に任せられるわけですから、もちろんやり甲斐はあるのだけれども、常にゼロから作るという辛苦も同時に抱えなければいけない。

阿部 国語は教科内容がややあいまいで、系統性、順序性が見えにくいものだから資料集的な発想が出てくるのでしょうが、やはりきちんと系統性、順序性はあるのです。一つ一つの教材の学習も

それでも忙しい現状ですが、それはたして可能なかということですが、甲斐先生、現場ではどうですか。

甲斐 現場では、四月という忙しい時期に一年の見通しといわれても何があるかわかりませんので、とにかく教科書どおりに年間計画を作っておく。そして、必要に応じて省略したり、読むだけにしたりと軽重をつけながらやっているのが普通ではないかと思っています。進めていくうちに、テストがあるからここまで終えないとまずいということになって、今度はこちらの教材を先にやらなくてはいけないというように教材を組み替える必要が出てきたりもするわけです。そんなときでも、今回の教科書のように、この教材ではなんの力をつけるのかということが見れば、単元や教材の再編、組み替えというのはすごくやりやすいのではないかと思います。



「国語」1 P.166・P167「少年の日の思い出」

「国語」1 P.58「光と風からもらった贈り物」



「国語」2 P.138「根拠を明らかにして書こう」

また、OECDの調査で求めている読みの力というのは、狭い意味での読み取りだけではだめなんですね。読むという力を、ただ読み取るだけでなく、表現するところまでの流れの中で考えていくことが重要です。その面でも新しい教科書はうまく関連させて学習できるようになっています。

例えば、二年第五単元では、説明文「モアイは語る」で、根拠を確かめながら筆者の考えを読み取りますが、次の「根拠を明らかにして書こう」という書くことの教材では、説明文で読み取った筆者の工夫を参考に、根拠を意識しながら意見文を書く学習をします。

現場で役立つ「自由裁量」の余地についてもサポート

阿部 教科書の単元構成や配列に自由裁量の余地があると、地域や生徒の実態に合わせて使いやすいのだが、という声があるようです。確かに教師は、地域やクラスの実態に即したカリキュラムを組むことが求められています。地域によっては二学期制や少人数制指導の導入もあるでしょうし、「評価」との関係で個に即した対応も求められています。そのような中で、現場に役立つ「自由裁量」の余地を含んだ教科書とはどのようなものなのかということについては、十分検討される必要がありますね。

甲斐 18年度版の教科書を編集するに先立って、先生方の教科書に対するご意見をうかがうアンケート調査をしましたね。(「国語教育相談室NO.43」参照)その結果を見ると、学校の事情や生徒の実態に合わせて単元や教材は柔軟な構成であることが望まれています。このあたりが、「自由裁量」の余地として求められていることではないでしょうか。さらに

確かな国語の力は、順序性、系統性、関連性を意識した学習の中から生まれます。

もちろん大切ですが、一つ一つがバラバラでは、国語の力は十分に定着しません。繰り返し深まっていく学習が必要な国語こそ、教科内容を明確にして、順序性・系統性を意識的に作っていかねばいけない。教科書がそれを提案していかないといけないと思います。だからといって、あまりしびりが強すぎると今度は先生方の裁量の余地がなくなってしまうので、そこは柔軟性が必要です。ただし、自由裁量というのと全部ゼロから作るというのは意味が違うと思います。

二年でいうと、第三単元の「盆土産」は、作品が展開する中で家族像や人物像がだんだんと鮮明になってくるという特徴があります。一方、第六単元の「走れメロス」は、作品が展開する中でメロス

の人物像が鮮明になってくるのですが、それだけでなく、メロス自身が大きく変容していきます。二つの作品の性格は違うので、当然作品の読み取り方にも違いがある。教材の順番にはやはり意味があるので。



甲斐 本場にそうですね。「登場人物それぞれの人柄や思いをとらえる」「作品の中に描かれている優しさや温かさなどを表現に即して読み味わう」という目標で二年の「盆土産」を読み深めることができれば、続く「字のないはがき」では、その力が生かされて、何も言わなくてもずっと読みにスライドできるのです。単元として構成されていることの強みはそういうことではないかとわたしは理解しています。そのような関係の中で、一つ一つの作品をバラバラに読んだときには得られないものを生み出すことにもなってくるのではないかと。そこに、安心して使える教科書の姿があると思います。

このような教科書だからこそ、自由裁量の効果も大きいのではないのでしょうか。もし仮に、「よし、とことんやるぞ」と思う

たら、次に「走れメロス」をもつてくると、「葛藤がよく表れている言葉のところが音読してみよう。」と言っただけでも、かなり人物をとらえた読みができると思います。

高木 単元の構成や配列を考える際には、文章の順序性だけを考えればいいのではなく、子どもの力との関係で考えなければいけない。そこに季節など学習時期の問題とか、テーマ性とか、活動との組み合わせとか、いろいろなことが絡むのだらうと思うのです。その教材でつきたい力というのは、その前でやった学

習との関係で出てくるわけですね。教材は孤立してあるわけではないので、やはり全体の流れというものを意識しないといけないわけです。

別の言い方をすれば、ゼロからクラスに合わせて単元を作る必要があるときでも、教科書の中で、ある角度から教材を読み取ったり資料として使ったりするといった組み合わせや位置づけが一つのパターンとして示されているということとは、とても大事なことだと思つのです。

一年の説明的文章で、「ちよつと立ち止まって」といっしょに「クジラたちの声」があるでしょう。あれも組み合わせの意味があるわけですね。

「ちよつと立ち止まって」で段落について意識化させた後、「クジラたちの声」でも少し広い意味での段落、文章構成を理解させるわけです。

二年の第六単元「走れメロス」では、メロスの生き方にかかわって読解をしますが、子どもはメロスの生き方を考えるときは、結局、自分の生き方を考えているのです。だから小説はおもしろいわけですね。その後、「視点を変えて書く」と自分で分について書くというように、意味のある学習の系統性、順序性はとても大切です。



阿部 教科書というのは、系統性や順序性の中で教材や活動を例示するというようにある程度の筋がある。とはいえ、初めから終わりまで変更の余地もなく組まれているわけではなく、学校や学級の事情で順番が入れ替わったり省略したりする場合でも十分対応できるようにしていることが必要です。

この点については編集会議でずいぶん検討し、苦労して作ってきたところだと思つんですね。



例えば、一年の十二月に、「調べたことを正確に伝えよう」というレポートにまとめる活動がありますが、学年の初めのほうでやりたいというのであれば入れ替えられますね。二年の「人物紹介パブリック」を作る」と「根拠を明らかにして書く」とも順序を入れ替えることができます。それから、夏休み前の読書単元を説明文と入れ替えるということも可能です。

また、三年の第二単元には、「メディア社会を生きる」という説明文が単独で位置づけられていますが、次の「新聞の特徴を生かして書く」という「書くこと」の教材と組み合わせて単元化することができます。反対に、読む教材と「書くこと」の教材が組み合わされている単元を、それぞれ切り離して利用することもできます。単元の配当時数をほぼ同じ長さにしていますから、例えば、三年の二学期に位置づけられている古典単元を一学期に位置づけるといふようなことも可能です。現場の多様な実態に合わせて使っていただくことができます。

元を、それぞれ切り離して利用することもできます。単元の配当時数をほぼ同じ長さにしていますから、例えば、三年の二学期に位置づけられている古典単元を一学期に位置づけるといふようなことも可能です。現場の多様な実態に合わせて使っていただくことができます。

これからの教科書に求められるのは、教科書外での学習のモデルにもなりうること

阿部 前に勉強したことを次の教材で有効に使えとか、前の学習で学んだことを生かしつつ、さらに学びを豊かにして

いくとか、教科内容のつながりが見えやすくなっている教科書が、おそらくこれからの教科書だと思います。

今まではそうではありませんでした。その作品だけ、その文章だけがわかったらそれでいい。だから振り返ってみる意味も必要もないのです。教師の自由裁量は認めつつも、やはり一定の系統性、順序性を重視した教科書がこれからはもっともと問われるような気がしますね。

今まで、子どもに国語の力がついたという実感をなかなかもてませんでした。ですから、前よりも小説が読めるようになったとか、説明文がわかるようになったとか、具体的に実感できるような仕掛けがある教科書にしなければいけま

これから求められるのは、 学習のモデルが示されていて、 それを学ぶ子どもが見える教科書です。

せん。新しい教科書は、このような点が改善されていると思います。

高木 教科書での学習が最低基準になってくるとすると、そこから広げるためには、教科書外のいろいろなものを使った学習活動が必要になってくるだろうと思います。そのときに、教科書に学習内容とが学習モデルが示されていることと、どういった活動にどういった教材が必要なのかも見えやすくなります。そういう意味で、教科書というのはただの資料集ではなく、学習モデルを示すものである。そのモデルがあるからこそ教科書外で効果的な学習ができるという、そういう時代になってくるのではないかという気がしますね。

学習の核であり、指導の核でもあり、教育内容の核でもある。でも逆にいうと、核でしかない。本当はもっとそこから広がって学習してほしい。そういう教科書になっていくといいのではないのでしょうか。そのためには、もっと時間数が必要だということが大前提ですが。

甲斐 今までの教科書は、教師が教える姿が見える教科書でした。でも、これからの教科書に求められているのは、これに学ぶ子どもの姿が見えなくてはいけないと思います。

チョーク一本持って教えた時代の教科書ではなくて、本当に学びを共有して、子どもの姿が見える教科書でなくてはならないと思います。

